

AutoCAD の ヒントとコツ

VOL. 1 – 2018.7

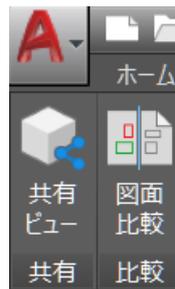
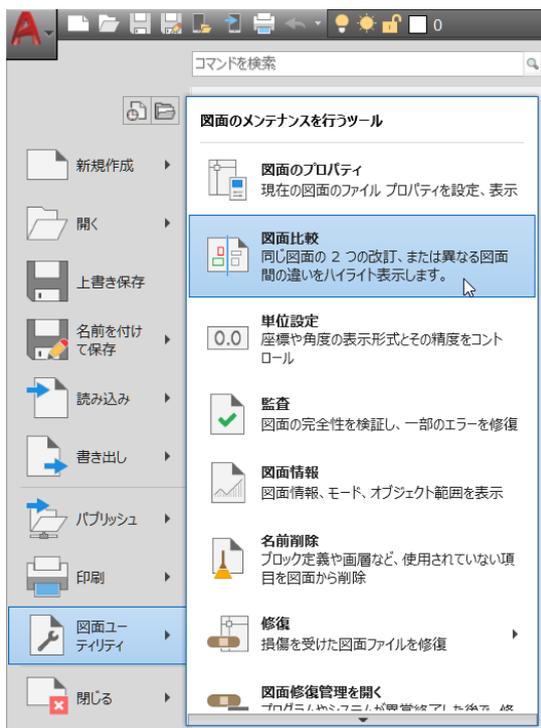




異なる図面間の違いを比較

AutoCAD 2019 ならびに AutoCAD LT 2019 の新機能である図面比較を利用すると、バージョンの異なる図面間の形状の違いを可視化、レポートできます。

図面比較の機能は、AutoCAD で図面を開いていない場合には[アプリケーション]メニュー > [図面比較]から、AutoCAD で図面を開いている場合には[アプリケーション]メニュー > [図面ユーティリティ] > [図面比較]、あるいは[コラボレート]タブ > [比較]パネル > [図面比較]、または COMPARE コマンドから実行できます。



[図面比較]ダイアログで対象の2つの図面ファイルを選択します。その対象の図面ファイルを AutoCAD で事前に開いておく必要はありません。

比較を実行すると、比較結果のファイルが作成され、[比較]パネルで表示順序、図面 1/2/両方に共通の表示/非表示、表示色の変更、図面 1/2 ファイルを開く、図面情報の利用ができ、[比較フィルタ]パネルで文字やハッチングを比較するかどうかのコントロール、[変更セット]パネルで雲マークの表示/非表示、雲マークの形状を矩形/ポリゴンに指定、雲マークの余白を設定、変更セットの前後の表示の切り替えが行えます。



 比較結果のファイルは、DWG ファイルとして保存でき、開いた際には[比較]タブが再度表示され、比較結果の確認が可能です。

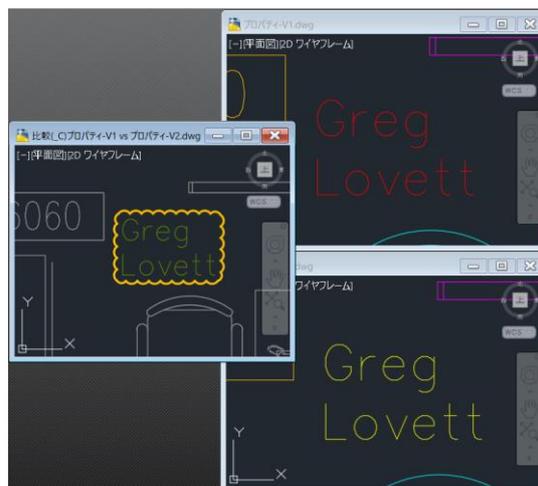
図形のプロパティの違いを比較

図面比較の機能は、図面間の図形の位置の違いやあるなしを判別してくれますが、図形の画層や色の違いといったプロパティ情報まで比較する場合には、システム変数 COMPAREPROPS でコントロールできます。既定値の値は 0 で、プロパティ情報の比較はしませんが、例えばシステム変数 COMPAREPROPS=3 にすると画層と色の違いを変更点として比較します。

利用できる値は以下の通りで、組み合わせる場合はそれらの値の合計を使用します。

値	説明
0	プロパティを比較しない
1	色を比較
2	画層を比較
4	線種を比較
8	線種尺度を比較
16	線の太さを比較
32	透過性を比較
64	厚さを比較

このシステム変数の設定はレジストリに保存されます。

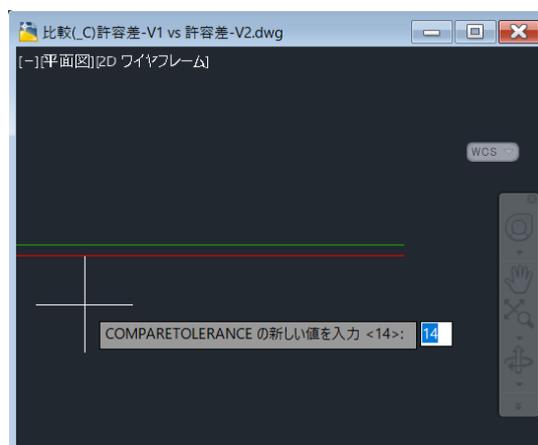


図面比較の許容差を指定

図面比較機能で変更内容を認識する許容差をシステム変数

COMPARETOLERANCE で小数点以下何桁までの違いを識別するかのコントロールができます。

既定値の値は 6 ですが、0~14 までの値を指定できます。このシステム変数は図面に保存される点に注意してください。

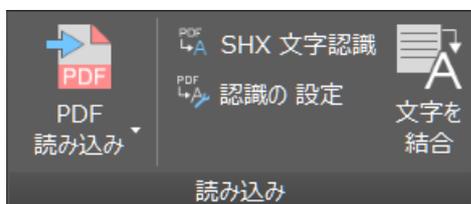




PDF の読み込み

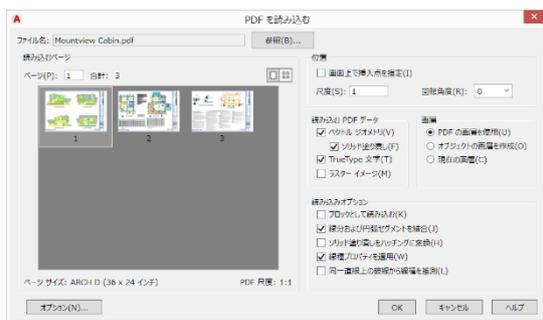
AutoCAD 2017 および AutoCAD LT 2017 から PDF ファイルを読み込む際に、AutoCAD の 2D ジオメトリに変換することができます。

PDF の読み込みは、[挿入]タブ > [読み込み]パネル > [PDF 読み込み]から実行できます。あるいは、PDFIMPORT コマンドを実行します。



アプリケーションメニューの[読み込み] > [PDF]からも実行できます。

PDF ファイルを選択すると、[PDF を読み込む]ダイアログが表示され、読み込むオプション設定がおこなえます。



PDF ファイルが複数のページを持つ場合は、どのページを読み込むのかを指定します。(一度に 1 ページしか読み込めません)

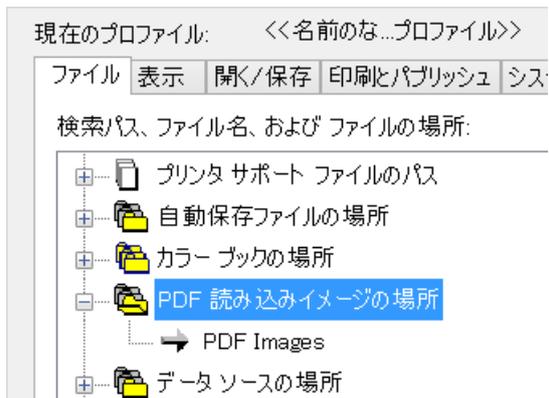
以下のようなオプションを設定できます。

- 画面上で挿入位置を指定する/しない、尺度、回転角度を指定

4 | ヒントとコツ

- 読み込む PDF データを選択(ベクトルジオメトリ、ソリッド塗り潰し、TrueType 文字、ラスターイメージ)
- どの画層を使って読み込むか
- 読み込みオプションとして、[ブロックとして読み込む]、[線分および円弧セグメントを結合]、[ソリッド塗り潰しをハッチングに変換]、[線種プロパティを適用]、[同一直線上の破線から線種を推測]

💡 PDF ファイルに含まれるラスターイメージは、PNG ファイルとして展開され、AutoCAD 上でアタッチされます。それらのイメージファイルは、[オプション]ダイアログの[ファイル]タブ > [PDF 読み込みイメージの場所]で指定された場所に保存されます。既定値では、PDF ファイルと同じフォルダ内に PDF Images フォルダが作成され、そこに格納されます。



💡 [ソリッド塗り潰しをハッチングに変換]オプションを使うと、読み込み処理に時間がかかります。

💡 [線種プロパティを適用]オプションを使うと、読み込まれたオブジェクトの線

の太さのプロパティを保持します。使用しない場合、AutoCAD は既定の線の太さを使用します。

💡 [同一直線上の破線から線種を推測]オプションを使うと、AutoCAD は同一直線上の破線やドットの部分を一つのポリラインに置き換えます。その破線の間隔に基づく PDF_IMPORT という名前の線種が作成されて、そのポリラインに割り当てられます。

このオプションを使用しなかった場合は、破線部分でバラバラのポリラインとして読み込まれます。

SHX 文字認識

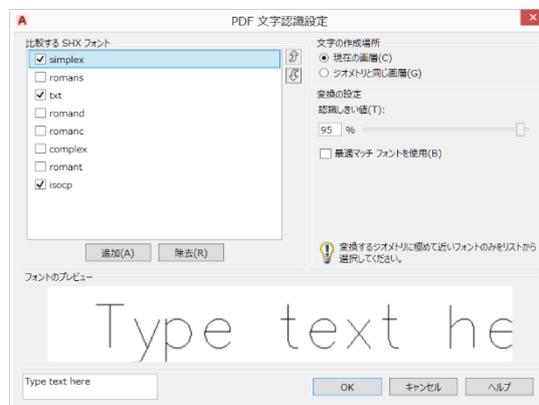
PDF ファイル内の TrueType 文字は、AutoCAD のマルチテキストオブジェクトとして読み込まれますが、PDF ファイル内の SHX フォントを使った文字は、文字として認識されず、ポリラインを使って読み込まれます。

AutoCAD 2018 および AutoCAD LT 2018 から利用できる SHX 文字認識機能を使うと、PDF ファイルから読み込んだ SHX フォントを表すジオメトリを認識して、1 行のマルチテキストに変換してくれます。

SHX 文字認識機能は、[挿入]タブ > [読み込み]パネル > [SHX 文字認識]から利用できます。あるいは、PDFSHXTEXT コマンドを実行します。

その変換するときのオプションを[PDF 文字認識設定]ダイアログで設定できます。このダイアログは、[挿入]タブ > [読み込

み]パネル > [認識の設定]からアクセスするか、PDFSHXTEXT コマンドの[設定(SE)]オプションを使用します。



💡 SHX 文字認識機能は、ビッグフォントを使用した日本語には対応していません。

💡 [最適マッチフォントを使用]オプションを使用すると、[比較する SHX フォント]でチェックされたフォントを上から順番に比較して、[認識しきい値]を超える最初のフォントが使用されるのではなく、ベストマッチしたフォントが使用されます。

💡 どのフォントを選べばいいかわからない場合は、リストからフォントを選択して、テキストボックスに文字を入力して、[フォントのプレビュー]で文字が似たフォントを探して選択します。

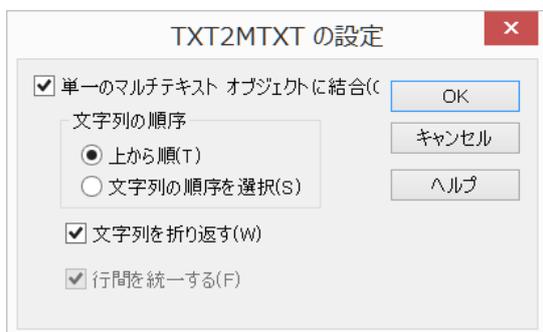


複数の文字を一つに結合

PDF ファイルから読み込んだ TrueType 文字や、SHX 文字認識を使って変換した文字は、1 行のマルチテキストオブジェクトになっています。AutoCAD 2018 および AutoCAD LT 2018 から利用できる文字を結合機能を使うと、それらの文字を 1 つの複数行マルチテキストオブジェクトに結合できます。

文字を結合機能は、[挿入]タブ > [読み込み]パネル > [文字を結合]から利用できます。あるいは、TXT2MTXT コマンドを実行します。

TXT2MTXT コマンドの[設定(SE)]オプションを使用して、結合結果の調整ができます。



2 つのマルチテキストを文字を結合機能を使うと、以下のように 1 つの複数行のマルチテキストにできます。

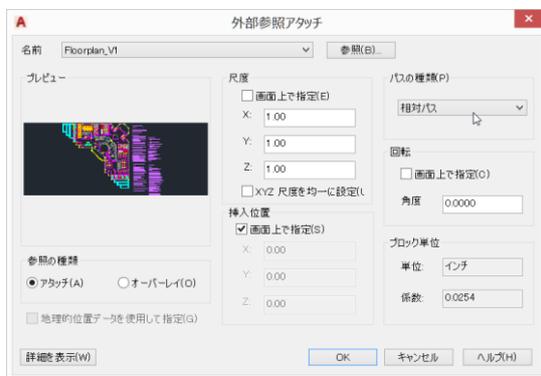




外部参照パス

AutoCAD 2018 および AutoCAD LT 2018 から、外部参照ファイルが見つからない問題を避けるために様々な機能強化がおこなわれています。

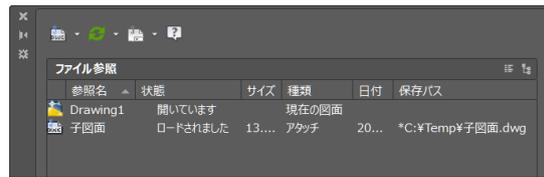
外部参照ファイルをアタッチする際に、[パスの種類]の既定値が従来の絶対パスから相対パスになりました。



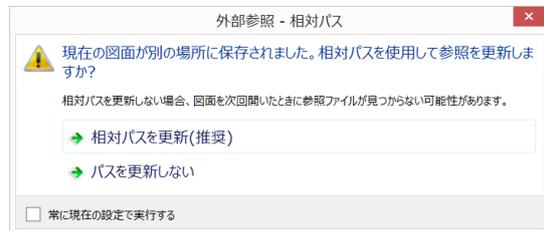
💡 パスの種類の既定値は、システム変数 REFPATHTYPE で設定できます。この設定はレジストリに保存されます。利用できる値は、以下の通りです。

値	説明
0	パスなし
1	相対パス
2	絶対パス

保存されていないファイル上で外部参照ファイルを相対パスでアタッチすると、[外部参照]パレット内の外部参照の[保存パス]には、先頭に*(アスタリスク)がついた絶対パスが表示されます。これは親図面が保存されると適切な相対パスに置き換わる一時的なパスであることを示しています。

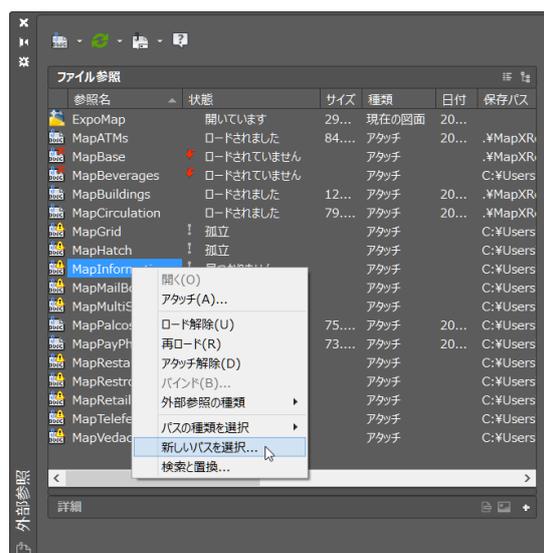


💡 現在開いているファイルが相対パスの外部参照をアタッチしている場合、別の場所にファイルを保存すると、相対パスを更新するかどうか尋ねてくるので、[相対パスを更新(推奨)]を選択することをおすすめします。



見つからない外部参照を解決 ①

[外部参照]パレットに見つからない外部参照ファイルがある場合、修復する方法として、参照名を右クリックして、[新しいパスを選択]を使う方法があります。



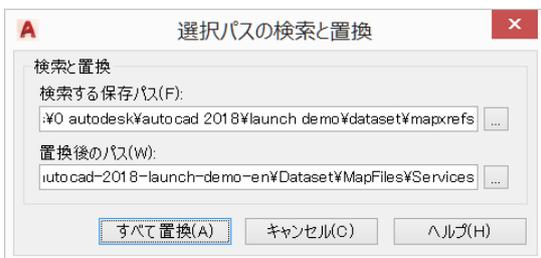


[新しいパスを選択]ダイアログで、見つからない外部参照がある場所を指定します。さらに、他の見つからない外部参照にも同じパスを適用するか尋ねてくるので、[はい]を選択して、同じ場所に見つかる参照もまとめて解決できます。

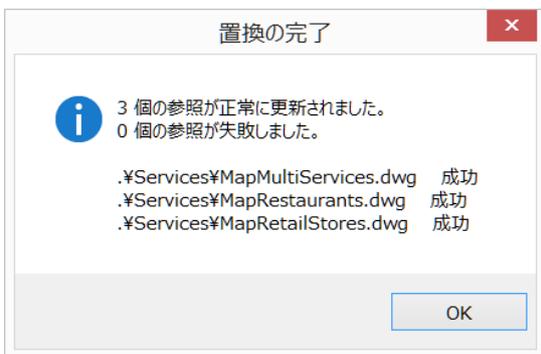


見つからない外部参照を解決 ②

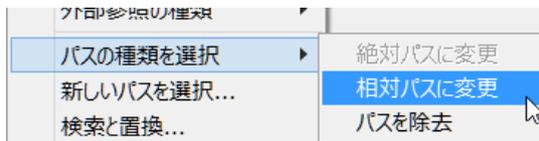
[外部参照]パレットに見つからない外部参照ファイルがある場合、修復する方法に、複数の参照名を選択、右クリックして、[検索と置換]を使うやり方があります。[選択パスの検索と置換]ダイアログで、[置換後のパス]を指定して[すべて置換]でパスを置き換えて解決します。



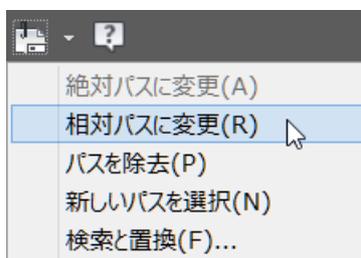
その結果は、[置換の完了]ダイアログで確認できます。



💡 [外部参照]パレットで、参照名を右クリックすると、[パスの種類を選択]を使って、絶対パスから相対パス、あるいはその逆などに変更できます。



または、ツールバーからメニューを選択して変更することもできます。



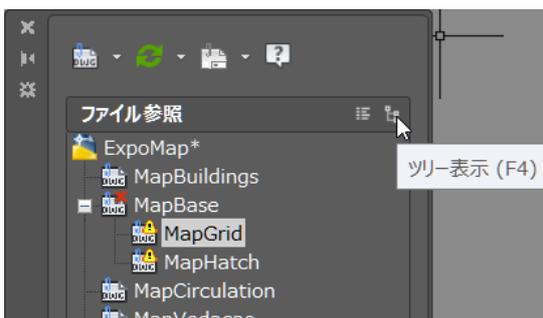
現在使用されているパスの種類は選択できないようになっています。

ネストされた外部参照

別の外部参照を含む外部参照をアタッチしている場合、その別の外部参照のことをネストされた外部参照と呼びます。ネストされた外部参照を含む外部参照がロードされていない、あるいは見つからない場合に、ネストされた外部参照は[外部参照]パレットで、孤立と表示されます。

ファイル参照			
参照名	状態	サイズ	種類
ExpoMap*	開いています	29...	現在の図面
MapATMs	ロードされました	84....	アタッチ
MapBase	ロードされていません		アタッチ
MapBeverages	ロードされていません		アタッチ
MapBuildings	ロードされました	12...	アタッチ
MapCirculation	ロードされました	79....	アタッチ
MapGrid	孤立		アタッチ
MapHatch	孤立		アタッチ
MapInformation	ロードされました	78....	アタッチ
MapMailBoxes	ロードされました	73...	アタッチ

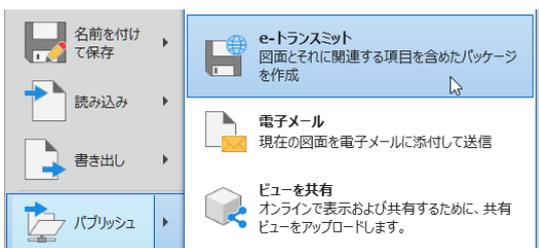
孤立状態の外部参照がある場合、[外部参照]パレットを[ツリー表示](F3)キーで一覧表示、[F4]キーでツリー表示に切り替わります)にすると、ネストされた外部参照がどの外部参照に含まれているかがわかるので、その親の外部参照を解決します。



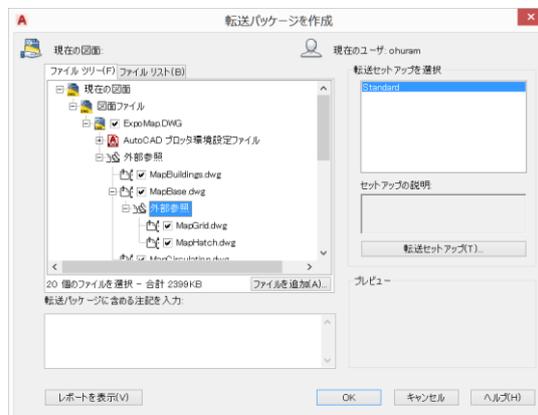
外部参照をまとめて渡す

関係者に図面を渡す場合、外部参照ファイルも一緒に渡さないと相手側で完全な図面として開くことができません。そのような場合、e-トランスミット機能を利用すると、関連するファイルを転送パッケージにまとめて相手に渡すことができます。

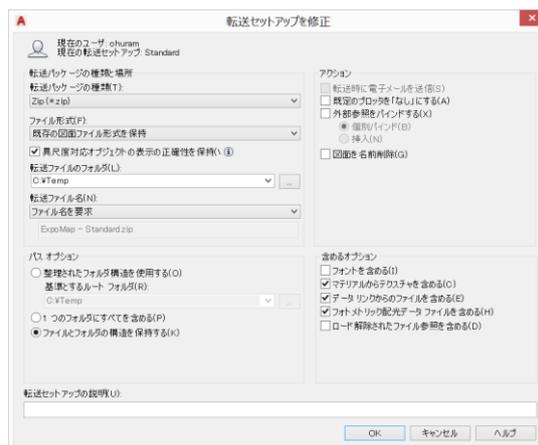
e-トランスミット機能は、[アプリケーション]メニュー > [パブリッシュ] > [e-トランスミット]、あるいは ETRANSMIT コマンドを実行します。



[転送パッケージを作成]ダイアログが表示され、転送パッケージに使用中の外部参照ファイルが含まれています。



[転送セットアップ]を使うと、作成する転送パッケージのオプションを指定できます。[ファイル形式:]で、現在の図面ファイル形式から以前のバージョンのファイル形式に変換でき、[図面を名前削除]オプションを使うと、ブロック定義や画層など使用されていない項目を図面から削除してファイルサイズを小さくして転送パッケージを作成できます。

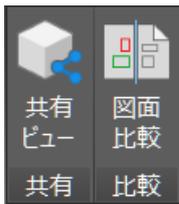




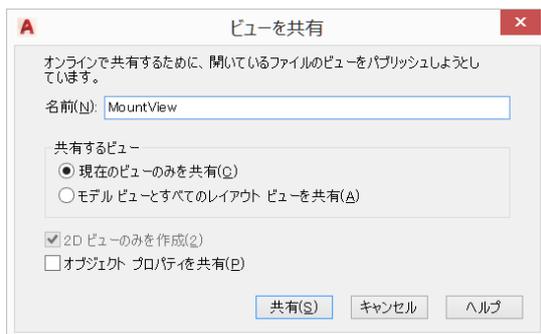
ビューを関係者と共有

AutoCAD 2019 ならびに AutoCAD LT 2019 の新機能である共有ビューを利用すると、元の DWG ファイルを相手に送ることなく、関係者と設計の共有が容易におこなえます。

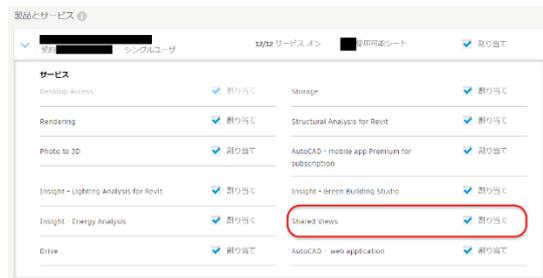
共有ビューの機能は、[アプリケーション]メニュー > [パブリッシュ] > [ビューを共有]から、あるいは[コラボレート]タブ > [共有]パネル > [共有ビュー]で[共有ビュー]パレットを開く、または SHAREVIEW、SHAREDVIEWS コマンドから実行できます。



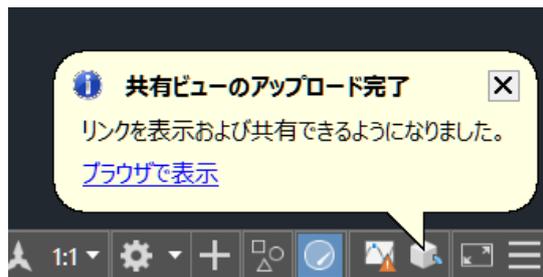
SHAREDVIEWS コマンドで[共有ビュー]パレットを表示し、[新しい共有ビュー]を選択するか、SHAREVIEW コマンドを実行して、[ビューを共有]ダイアログを表示して、ビューの名前、共有するビュー(現在のビューのみ、モデルビューとすべてのレイアウトビュー)、3D モデルを含む場合、2D ビューのみか 2D ビューと 3D ビューを作成するか、オブジェクトプロパティを共有するかどうかを設定できます。



 共有ビューをアップロードするには、AutoCAD/AutoCAD LT のサブスクリプションメンバーで、Autodesk アカウントを使ってサインインしている必要があります。サブスクリプションメンバーであるにもかかわらず、共有ビュー機能が利用できない場合は、[Shared Views]のサービスの割り当てがされているか契約管理者に確認してください。

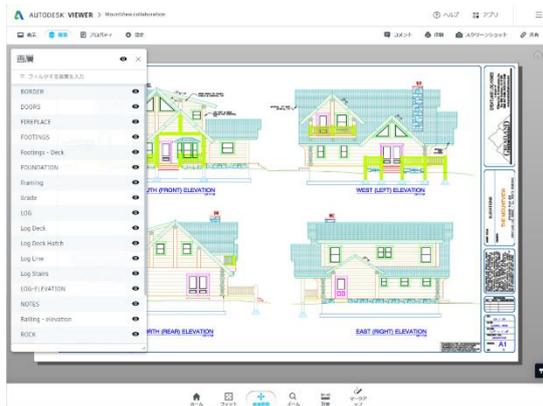


[共有]を実行すると、その処理はバックグラウンドで実行されるので、その間 AutoCAD で他の作業をおこなえます。処理が完了すると、画面右下に通知が表示され、[ブラウザで表示]をクリックするとブラウザ上で共有ビューの内容が確認できます。

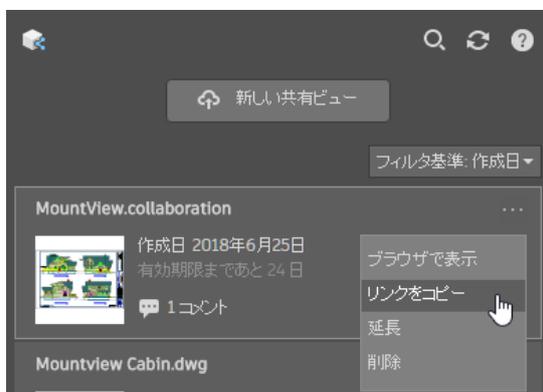


共有ビューは、Web ブラウザ上で Autodesk Viewer を使って表示されます。表示するビューの切り替え、画層の表示/非表示、モデルブラウザでモデルの表示/非表示、プロパティの表示、各種設定、印刷、ホーム画面の表示、フィットズ

ーム、画面移動、ズーム、計測が可能です。また、Autodesk アカウントでサインインすることで、コメントの追加、スクリーンショットの保存、共有、マークアップの保存が可能です。



💡 [共有ビュー]パレットのメニューから[リンクをコピー]、あるいは Autodesk Viewer の[共有] > [コピー]で、その共有ビューにアクセスできるリンクをコピーできるので、メールに貼り付けて関係者に送信すれば、関係者は AutoCAD を持っていなくても、Autodesk アカウントを持っていない場合でも、そのリンクからブラウザ上でビューを閲覧でき、Autodesk アカウントでサインインすれば、コメントを返すことができます。

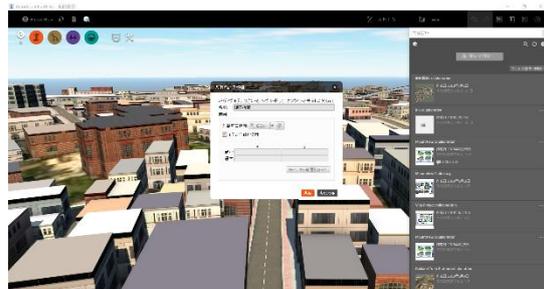


💡 共有ビューは既定値では 30 日間有効で、それが過ぎるとアクセスできなくなりますが、必要に応じて[共有ビュー]パレットのメニューから[延長]を使い、有効期限を 30 日にリセットできます。

💡 AutoCAD 上では[共有ビュー]パレットで関係者からのコメントの有無とその内容が確認でき、返信もできます。



💡 共有ビューの機能は、3ds Max 2019、InfraWorks、Inventor Professional 2019 でも同様に利用できます。





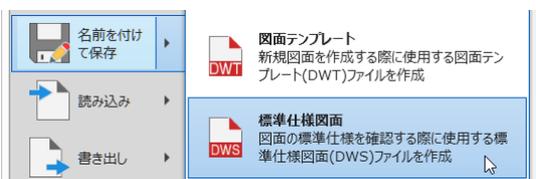
CAD 標準仕様

AutoCAD で CAD 標準仕様機能を利用すると、図面ファイルの画層、文字スタイル、線種、寸法スタイルのプロパティが社内で定めた仕様に準拠しているかどうか確認でき、仕様に適合しないプロパティを修正することもできます。これによって図面の一貫性を保ち、品質を高めることができます。

AutoCAD LT では CAD 標準仕様機能は利用できません。

標準仕様ファイルを作成

CAD 標準仕様機能を利用するには、社内で定めた画層、文字スタイル、線種、寸法スタイルを含むファイルを標準仕様ファイル(.dws)として作成します。
[アプリケーション]メニュー > [名前を付けて保存] > [標準仕様図面]を選択するか、図面に名前を付けて保存する際に、[ファイルの種類]を AutoCAD 標準仕様図面 (*.dws)を選択して、ファイルを保存します。



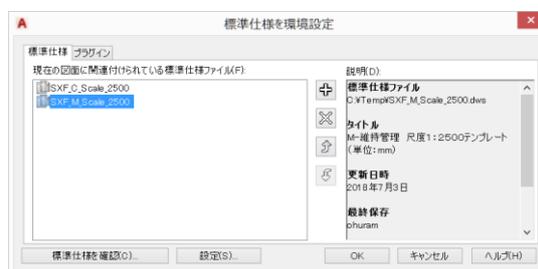
標準仕様ファイルを関連付け

CAD 標準仕様機能で図面を確認するには、図面に標準仕様ファイルを関連付けます。現在の図面に標準仕様ファイルを

関連付けるには、[管理]タブ > [CAD 標準仕様]パネル > [環境設定]、または STANDARDS コマンドを実行します。

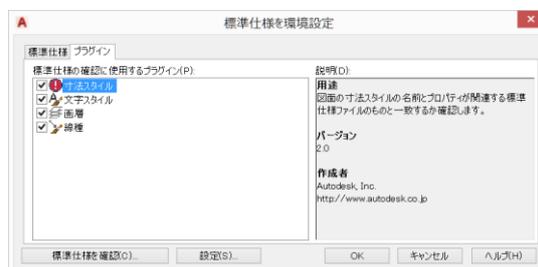


次に、[標準仕様]タブの[+]で、作成した標準仕様ファイルを選択します。



標準仕様ファイルは複数関連付けることができますが、標準仕様ファイル間で矛盾がある場合は、最初に関連付けられた標準仕様ファイルが優先されます。

[プラグイン]タブで標準仕様の確認に使用するプラグインを指定できます。



画層プラグインでは、色/線種/線の太さ/印刷スタイルモード/印刷スタイル名のプロパティを確認します。表示・非表示/フリーズ・フリーズ解除/ロック/印

刷する・しないのプロパティは確認しません。

標準仕様違反を確認

標準仕様違反について確認すると、関連付けられた標準仕様ファイルに基づいて、適合しない名前の付いたオブジェクトが存在する、オブジェクトの名前は同じだがプロパティが異なるといった問題を見つけて修正できます。

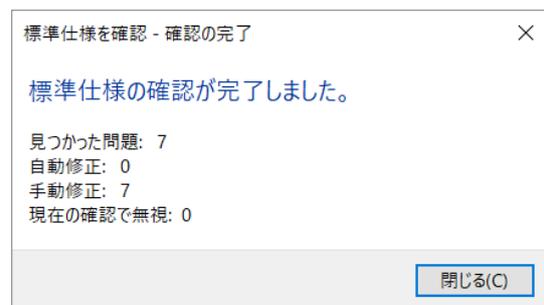
確認を行うには、[管理]タブ > [CAD 標準仕様]パネル > [確認]、または CHECKSTANDARDS コマンドを実行します。

[標準仕様を確認]ダイアログが表示され、見つかった問題が確認でき、修正候補を選択して、その変更をプレビューして[修正]をクリックして修正を適用するか、問題を無視するかを選択できます。



💡 標準仕様に適合しない名前の付いたオブジェクトを修正すると、そのオブジェクトは図面から名前削除されます。例えば、標準仕様に適合しない画層 WALL を、標準仕様に適合する画層 ARCH-WALL に置き換える修正をした場合、画層 WALL のすべてのオブジェクトは画層 ARCH-WALL に変換され、画層 WALL は名前削除されます。

確認が完了するとダイアログで、見つかった問題数と修正あるいは無視した数が表示されます



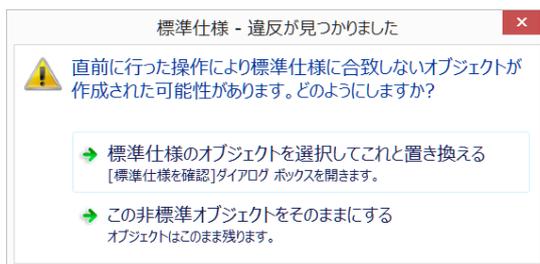
標準仕様違反を通知

作業中に標準仕様違反が発生した場合に、通知させることができます。

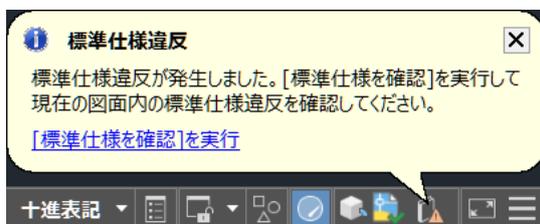
通知を設定するには、[管理]タブ > [CAD 標準仕様]パネル > [環境設定]で [標準仕様を環境設定]ダイアログの[設定]を選択し、[CAD 標準仕様の設定]ダイアログを開き、[通知の設定]で目的のオプションを選択します。



[標準仕様違反に対して警告を表示]を選択している状態で違反が発生すると、以下の警告が表示され、対応を選択できます。



[標準仕様のステータスバーアイコンを表示]を選択している状態で違反が発生すると、以下の通知が表示され、[標準仕様を確認]を実行のリンクをクリックして、[標準仕様を確認]ダイアログを表示して、対応を選択できます。

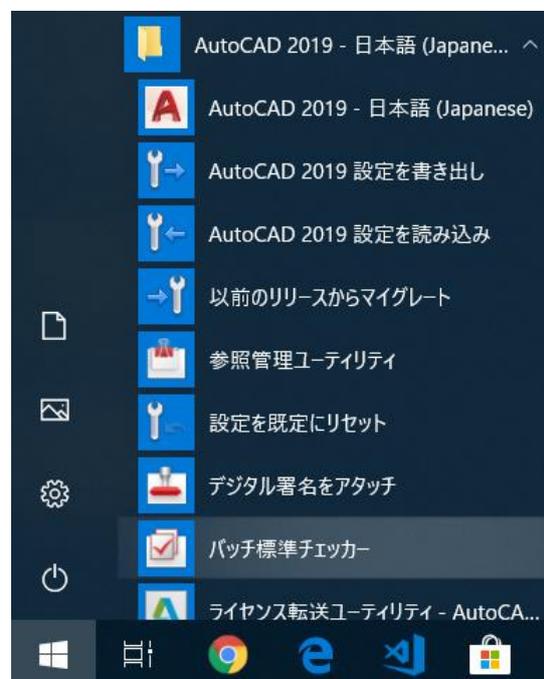


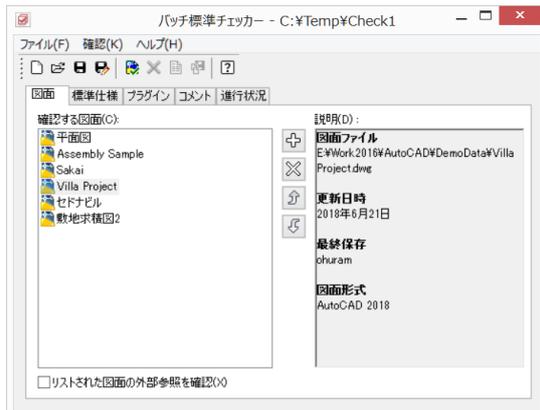
💡 この通知は、システム変数 STANDARDSVIOLATION でも設定され、既定値は 2 で、レジストリに保存されません。

値	説明
0	通知を無効
1	標準仕様違反発生時に警告を表示
2	標準仕様違反発生時にステータスバーアイコンを表示

複数図面の標準仕様違反を確認

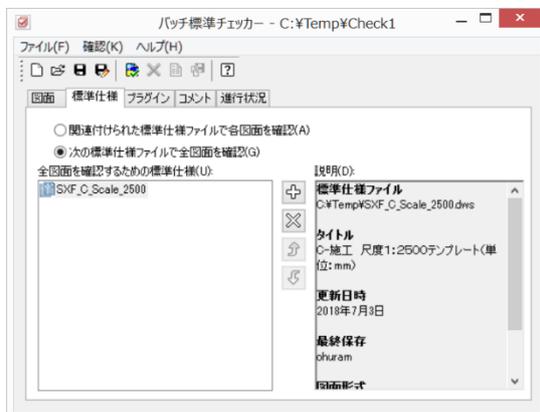
複数図面の標準仕様違反を確認するには、バッチ標準チェッカーが使用できません。バッチ標準チェッカーを起動するには、Windows の [スタート] メニュー > [AutoCAD 2019] > [バッチ標準チェッカー] を選択します。



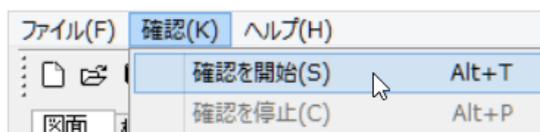


バッチ標準チェッカーを使用するには、確認する図面、確認に使用する標準仕様ファイル、確認で使用するプラグインを指定した標準仕様確認ファイル(.chx)を作成する必要があります。

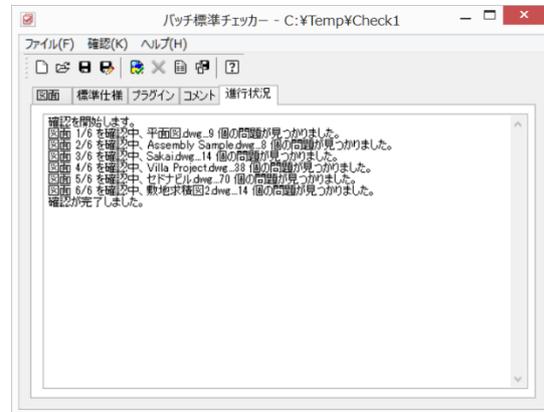
 [標準仕様]タブでは、図面に関連付けられている標準仕様ファイルで確認するか、このタブ上で指定された標準仕様ファイルで確認するかを指定できます。



処理を実行するには、[確認] > [確認を開始]メニューを選択するか、[確認を開始]アイコンをクリックします。



その処理の状況は、[進行状況]タブに見つかった問題の個数とともに表示されます。



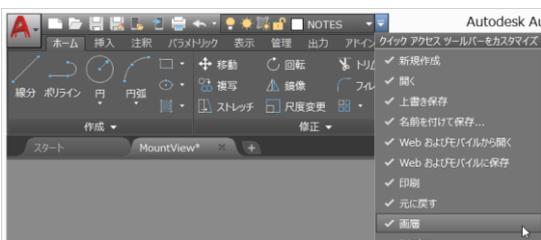
確認が完了すると、バッチ標準仕様確認の結果をまとめた HTML レポートが web ブラウザで表示されます。



 [確認] > [レポートを書き出す]メニューを使うと、レポートを他のユーザに配布可能な web ページ(*.htm)ファイルとして保存できます。

クイックアクセスツールバーに画層

AutoCAD 2018 ならびに AutoCAD LT 2018 以降で、クイックアクセスツールバーに画層コントロールオプションが表示できるようになりました。既定値では非表示になっていますが、クイックアクセスツールバーの右端の矢印をクリックして、[画層]にチェックを入れることで表示されます。



寸法の既定の画層を指定

AutoCAD 2016 ならびに AutoCAD LT 2016 以降で利用可能なシステム変数 DIMLAYER を使用すると、新しい寸法の既定の画層を指定できます。既定値では現在を使用になっていて、この値は図面に保存されます。

また、[注釈]タブ > [寸法記入]パネル > [寸法画層を優先]のリストから画層を選んでも設定できます。



💡 寸法の既定の画層を[現在を使用]に戻すには、[寸法画層を優先]のリストで[現在を使用]を選択するか、システム変数 DIMLAYER に (ピリオド) を入力します。

ハッチングの既定の画層を指定

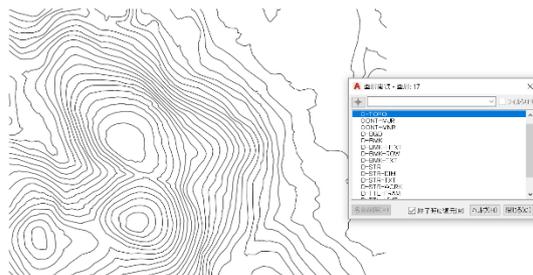
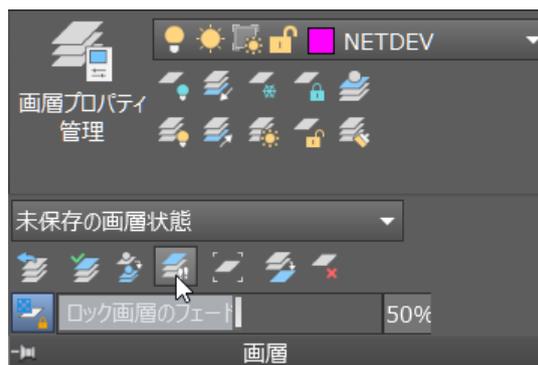
システム変数 HPLAYER を使用すると、新しく作成されるハッチングと塗り潰しの既定の画層を指定できます。既定値では現在を使用になっていて、この値は図面に保存されます。

💡 AutoCAD 2017 および AutoCAD LT 2017 以降では、システム変数 HPLAYER にまだ作成していない画層名を指定することができます。

指定画層のオブジェクトだけ表示

LAYWALK コマンドを使うと、選択した画層上のオブジェクトだけを表示できるので、画層に含まれるオブジェクトを簡単に確認できます。

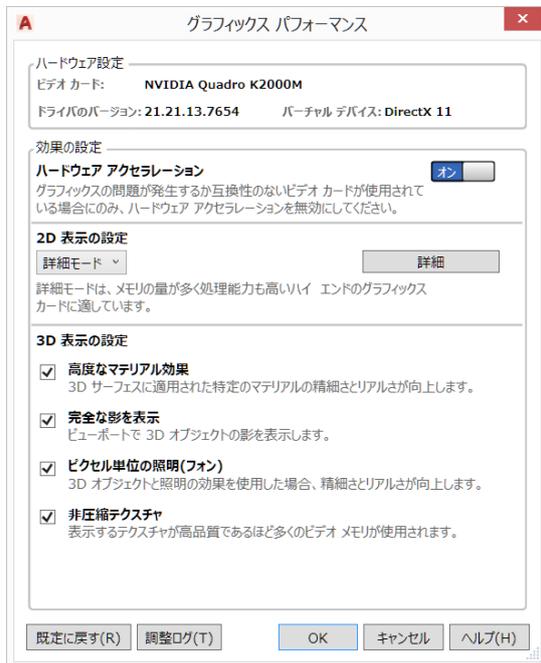
LAYWALK コマンドは、[ホーム]タブ > [画層]パネル > [画層閲覧]からも実行できます。



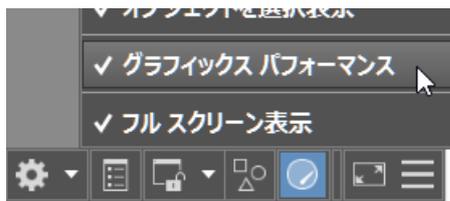


グラフィックスパフォーマンス

AutoCAD 2019 ならびに AutoCAD LT 2019 では、2D グラフィックスの再描画または再作図が必要となる操作が合理化され、大幅にパフォーマンスが向上しています。[グラフィックスパフォーマンス] ダイアログで、2D グラフィックスの動作を簡単に設定できます。



 [グラフィックスパフォーマンス] ダイアログは、GRAPHICSCONFIG コマンドあるいはステータスバーの[グラフィックスパフォーマンス]からアクセスできますが、ステータスバー上のアイコンは既定値でオフになっているので、オンにして表示します。

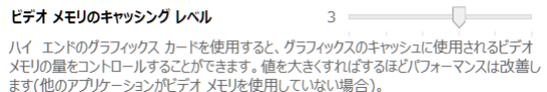


 AutoCAD LT では、[グラフィックスパフォーマンス]ダイアログ内に[3D 表示の設定]項目はありません。

2D 表示の設定

AutoCAD 2019 ならびに AutoCAD LT 2019 では、[グラフィックスパフォーマンス]ダイアログで、[2D 表示の設定]ができるようになり、基本/中間/詳細モードを選択できます。これは、使用する DirectX 11 互換のグラフィックスカードの設定を簡単に設定できます。基本モードはメモリが少ないグラフィックカードに適し、詳細モードはメモリの量が多く高性能なグラフィックカードに適しています。

 [2D 表示の設定]の[詳細]で表示される[ビデオメモリのキャッシングレベル]で、グラフィックスのキャッシュに使用されるビデオメモリの量をコントロールできます。値が大きいくればするほどパフォーマンスは改善します。



 [ハードウェアアクセラレーション]をオフにすると、[2D 表示の設定]は自動的にソフトウェアモードになります。

 グラフィックスパフォーマンスの一部の設定は、-GRAPHICSCONFIG コマンドからのみ利用できます。

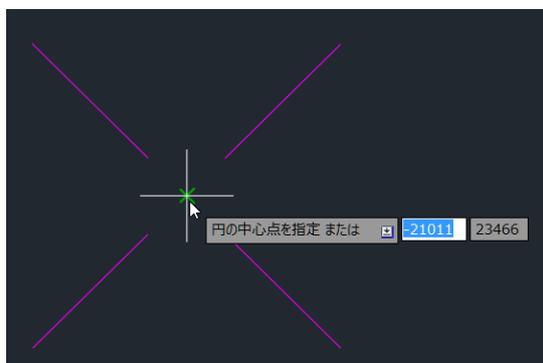


線種の空白部分にスナップ

AutoCAD 2017 ならびに AutoCAD LT 2017 以降で利用可能なシステム変数 LTGAPSELECTION を使用すると、線種の空白部分でもオブジェクトを選択またはスナップできるかどうかをコントロールできます。このシステム変数の既定値は 1 で、レジストリに保存されています。

値	説明
0	線種の空白部分で選択またはスナップはできない。
1	線種の空白部分で選択またはスナップできる。

下図の例では、破線の空白部分の交点スナップを取得しています。

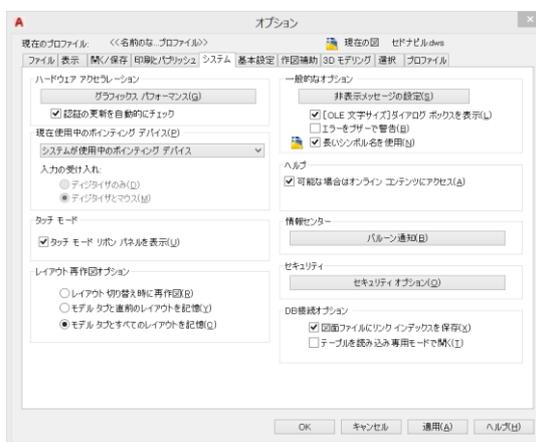


 システム変数 LTGAPSELECTION を有効にするには、[グラフィックパフォーマンス]の設定で、ハードウェアアクセラレーションと高品質ジオメトリをオンにする必要があります。

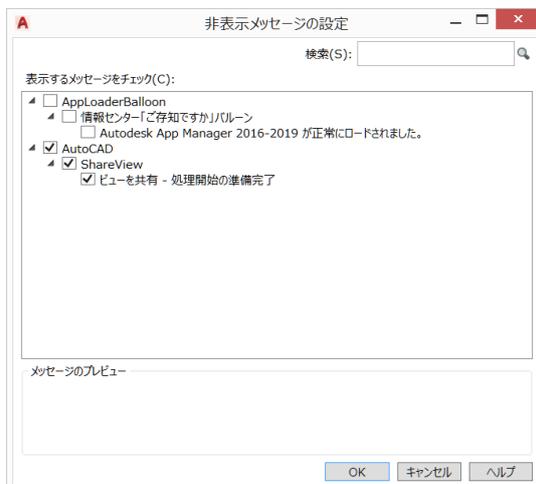
非表示にしたメッセージを再表示

[次回からこのメッセージを表示しない]を選択したメッセージを、再度表示させたい場合には以下の手順をおこないます。

1. [アプリケーション]メニュー > [オプション]、または OPTIONS コマンドを実行して、[オプション]ダイアログを表示し、[システム]タブを開き、[非表示メッセージの設定]ボタンを選択します。



2. [非表示メッセージの設定]ダイアログで再表示させたいメッセージをチェックして、[OK]をクリックします。



ヘルプの検索機能

AutoCAD および AutoCAD LT で、コマンド名はわかるけれど、そのコマンドがクイックアクセスツールバー、リボン、ステータスバー、アプリケーションメニューのどこにあるのかわからないということはないでしょうか。以下の手順で、ヘルプの検索機能を利用すると、矢印でその場所を示してくれます。

1. ヘルプでコマンドを検索し、そのページを開きます。(例:EXPLODE)



2. アイコンの隣にある[検索]をクリックします。

EXPLODE[分解] (コマンド)

複合オブジェクトを構成要素となっているオ:



3. 該当するメニューが矢印で示されます。



[スタート]タブを非表示

AutoCAD および AutoCAD LT を起動すると、最初に[スタート]タブが表示されません。



この[スタート]タブの表示はシステム変数 STARTMODE でコントロールできます。その既定値は 1 で、レジストリに保存されています。

値	説明
0	[スタート]タブを閉じ、次回から非表示
1	[スタート]タブを表示

💡 システム変数 STARTMODE の値を 0 から 1 にした場合、AutoCAD を再起動する必要があります。

製品体験版

AutoCAD www.autodesk.co.jp/products/autocad/free-trial

AutoCAD LT www.autodesk.co.jp/products/autocad-lt/free-trial

AutoCAD と AutoCAD LT の機能比較

www.autodesk.co.jp/compare/compare-features/autocad-products

動作環境

AutoCAD www.autodesk.co.jp/autocad-dousa

AutoCAD LT www.autodesk.co.jp/autocad-lt-dousa

Autodesk Knowledge Network(オートデスク ナレッジ ネットワーク)

オートデスクが提供するサポートサイトです。

knowledge.autodesk.com/ja

ユーザーフォーラム

www.autodesk.com/forum-jp

学習動画 - AutoCAD スキルアップシリーズ

www.autodesk.co.jp/acad-skill-up-view

オートデスク株式会社 www.autodesk.co.jp

〒104-6024 東京都中央区晴海 1-8-10 晴海アイランド トリトンスクエア オフィスタワーX 24F

Autodesk, the Autodesk logo, AutoCAD, AutoCAD LT, DWG, and TrustedDWG are registered trademarks or trademarks of Autodesk, Inc., and/or its subsidiaries and/or affiliates in the USA and/or other countries. All other brand names, product names, or trademarks belong to their respective holders.

オートデスクは、通知を行うことなくいつでも該当製品およびサービスの提供、機能および価格を変更する権利を留保し、本書中の誤植または図表の誤りについて責任を負いません。

© 2018 Autodesk, Inc. All rights reserved.

